



教養の文学部から教養の文学部へ

文学部長
信時 哲郎

2020年に甲南女子学園は創立100周年を迎えましたが、大学の設立は1964(昭和39)年。人間ならばそろそろ還暦ということになります。この時に設立されたのは教養系の文学部のみでした。

その後、実学重視の傾向が強まり、本学でも総合子ども学科や看護学科、理学療法学科、医療栄養学科が設置されました。文学部でも日本語日本文化学科に旅行会社やホテルでの活躍を目指すコースが開設され、メディア表現学科では、設立当初から学外でのアクティビティを積極的に進めており、大学全体が教養から実学重視に大きく舵を切っています。

さて、そのような状況でありながら「教養の文学部から教養の文学部へ」などというタイトルを掲げるのは時代錯誤のように思われるかもしれません。

たしかに医療系の教員が明日の医療を考えて論文を発表し、学生たちが資格取得のための勉強を続ける傍らで、宮沢賢治の論文などを書いていると「これでいいのだろうか?」と、我ながら思わないこともありません。しかし、それでも文学部は教養を忘れてはならない、と思うのです。

なにも実学を否定しようというつもりはありません。ただ、教養あつての実学であり、また、実学あつての教養だ、ということを強調したいだけです。

コロナ禍により私たちの生活は大きな変化を余儀なくされ、感染者数、ワクチンの接種率や副反応についての情報を、毎日、気にしながら生活しています。教養系の学問など、出る幕もないように思えます。

しかし、こうしたパンデミックの禍中だからこそ、何を信じて、何を疑うべきなのか、自分がどう生きていくのかを真剣に考える必要がでてきたとは言えないでしょうか?

もちろん、すぐに結論が出るわけではありません。それでもスペイン風邪の流行した100年前に、学校は休校の措置を取ったのか、修学旅行はどうなったのか、人々はそうした決定についてどう思ったのか… スペイン風邪とコロナウイルスは同じもの

ではありませんが、過去を精査することから明日の生き方が見えてくる可能性もあるように思うのです。

宮沢賢治は1919(大正8)年、東京の小石川病院に妹・トシの見舞いに行きます。トシはスペイン風邪に罹っていた可能性があったので、賢治は「私共は病院より帰る際は予防衣をぬぎ、スプレーにて消毒を受け帰宿後塩剥(えんぼつ=塩素酸カリウム)にて咽喉を洗ひ候」と手紙に書いており、十分な感染症対策をとっていたことがわかります。詩人・童話作家でありながら科学者でもあった賢治の行動は、100年後の私たちにヒントを与えてくれるかもしれません。

哲学者・ヴィトゲンシュタインは「世界は事物の総体ではなく、事実の総体である」と書きました。世界は**モノ**ではなく**コト**でできている、という意味です。日々の感染者数、ワクチン接種率… これらはとても重要な数値です。しかしこうした数値は、眼に見えやすく、概念化しやすいために**モノ**として扱われがちです。人間というのは、いったん**モノ**に目が行ってしまうと、本当に大事な**コト**については、ついつい後回しにしてしまう傾向があるのです。

日々のニュースを思い出してみれば、わかってもらえるかもしれません。数値(**モノ**)ばかりが繰り返されると、いつしか視聴者もそれだけを追いかけていけばいいような気になって、コロナウイルスで陽性となった人の不安、医療従事者のストレスといった**コト**の側面について、想像力が働きのくなくなってしまう。テストの点数や偏差値を、学力そのものだと勘違いしてしまうのも同じことです。

科学の重要性、あるいは実学の重要性を否定するつもりはありません。が、それらが重要であるからこそ、尚のこと忘れてはいけないのが教養、つまり「人間の精神を豊かにし、高等円満な人格を養い育てていく努力、およびその成果」(日本大百科全書)ではないかと思うのです。

未来が見えにくい今だからこそ、教養の力で未来への道を切り開く文学部でありたいと思います。